

歴史の哲学について

—ドイツで考えたこと—

岡崎英輔

昨年度、幸運にも一〇カ月に及ぶ在外研究の機会を与えられ、多くの方々のご助力とご指導を得て平成二年三月下旬から同三年一月下旬まで、西ドイツはフランクフルト及びミュンヘンを拠点に、ヘーゲルの思想形成をテーマに研究生活を送って来ました。

研究テーマがテーマだけに、研究地としてはヘーゲル研究の現在のメッカとも言わなければならないであろう。学や著名なヘーゲル研究者のディーター・ヘンリッヒがいるミュンヘン大学を考へないではなかったのですが、しかし、ポーフムに行つてそこで行なわれている初期ヘーゲルの手稿の解読作業や現在刊行中の大ヘーゲル全集の刊行作業の状況などを実見できたところで——それ自体非常に困難なことですが——自分のテーマにとってそれほど意味のあることとも思いませんでしたし、また例えば大学の講義等に出席し、或る程度理解しながらも行けるようになったところで、得るところ多々とも思いませんでした。ゼミナールになればとも思いましたが、しかし細かで微妙な問題についての論議を聞き分け、適切な回答を即座にやることのできるようになるためには相当の時間が必要だったでしょう。しかし、その時間もなかったのです。

こうして、ヘーゲルの思想形成をテーマとしながら、その研究生活は、ヘーゲル哲学の文献学的研究の先端を垣間見ること、ヘーゲル研究者の講義に連なることをも主目標とはしませんでした。実のところ、研究の最先端や西ドイツ哲学界の大勢などは、極論すれば、目のある人ならばわざわざド

イツに來なくても日本で取りよせた書物や雑誌の論文に注意深く目配りしていればある程度は分かることなのかも知れません。しかし、そうしたものによつては、それら哲学や研究やらがなぜ、どうして生まれてきたのかということは分からない。つまり、文献や研究成果からはそれらの根底にあるもの——哲学の基盤といったものはあまり見えてこない。それならば、今回、この根底にあるものを知り、感得してゆこう。それは、その哲学が生まれた地で、その風土文物に触れることで少しは見えてくるだろう、とこう考えました。このことは、表現を変えれば、哲学というものを具体的に生きた姿において捉えたいということでもありました。

以上のような訳で、自分の研究に直接役立つことよりも、自分が研究している事柄がどのような基盤から成立したのかを知ることに研究の主たる目的を定めました。こういう目的ならば、ヘーゲル哲学の生成を問題とする私の研究地としてフランクフルトは十分な意義をもってきます。というのも、ここはヘーゲルの哲学の生誕地とされているからです。ここには六カ月間滞在しました。なお、ミュンヘンには三カ月間、主に大学（ルートヴィヒ・マクシミリアン大学）とバイエルン国立図書館で資料蒐集を行うために滞在しました。

このような哲学の根底にあるものを感得しようという希望は、目指したものが漠としたものであったがために、満たされたようでもあり、そうでないようでもあります。

ともかく、四月以降、フランクフルト大学（ゲーテ大学）哲学部の図書館で資料の蒐集や研究を行い、二三の講義を聴講し、拙い言葉ながら比較的若い教官たちと研究やドイツ情勢について話したりしました。——しかし、言葉の障害は最後まで付き纏いました。また、時折はゲーテハウスをはじめ市内の文化施設等を見学し、時には鉄道により多くのドイツの街に幾多の文人や哲学者の足跡を訪ねたりしました。——これはミュンヘンでのことになりましたが——蔵書数四〇〇万部になんなんとする国立図

書館の膨大な図書カードあるいはマイクロフィルムから資料を検索しノートを作るのに週日没頭したこともありまして。——こんな風にして、日々が過ぎていきました。

この間、特にフランクフルトでは——ドイツ第一の国際空港を控えているからでしょうか——人種の雑多さや言語の多さに驚き（と言ってもそれが何人種か、どこ言葉かは殆ど分かりませんでした）が、服装の多彩さ、その配色の出鱈目さ等にびっくりしたり呆れたりした挙げ句、ドイツ人が何かにつけて総合したり統一したりしたのは現実が昔から呆れるほど雑多だからではないか、などと珍説を捏ね上げたり、また、散歩の途すがら、よく知られるハイデガーとレーヴィットの不和を田舎ものと都会人の対立と解釈してひとり悦に入るといふこともありました。また、真夏の暑い日に熱いアスファルトを手袋をはめただけの手で押し固め舗装している道路工夫に哀れを越して凄まじさを感じたりすることもありました。

こんな中に、世上の雰囲気は何となくせわしなく感ぜられてきました。はじめは、自分から言わば情報封鎖の状態に持ち込んでいたので、何のことか分かりませんでした。テレビやラジオは無し。したがって情報源は殆ど新聞のみでした。フランクフルター・アルゲマイネ、ディー・ツァイト、それに英字新聞のヘラルド・トリビューン。写真が主で少々煽情的なビルト、週刊誌のシュテルン、デア・シュピーゲル。それから、日本からの便り。これらによって、ドイツに統一の問題が迫りつつあることが次第にはっきり感ぜられてきました。生活物資もころなしに値上がりしているようです。

夏、石畳を焼いた日差しが陰り急に涼しさが感ぜられる夕方ともなると、街角や酒場で政治談義が始まったりしました。そんな話しの中には、まことにドイツ語らしい発音のなかに実にしばしば「ゴルバチョフ」とかコールという言葉が入ってきて、事態がソビエトあたりを中心動いているらしいことを示していました。なお、こんな形での政治談義を聞いたのはこのときくらいで、あとは殆ど耳

にしたことがあります。あまり好きじゃないのかも知れません。

統一をめぐる新聞論調も——新聞記事を読むには相当の訓練が必要のようで、見出しや記事の一部分を眺めるような読み方では記事の内容をとることなど殆ど不可能なので、大きなことは言えませんが——一流紙では何となく慎重なように読めました。ですから、統一などまだまだ先のことと思っ
ていました。

そうこうしている中に七月初め(一日)には通貨統一のニュースが伝えられ、更に八月下旬(二三日)には東ドイツが一〇月三日を期して西ドイツに統合されるということになりました。この間の経緯は、情報過剰ならぬ情報過少の身にとってはあまりに目まぐるしく錯綜していて殆どフォローすることが出来ませんでした。「あれよ、あれよ」という表現がありますが、まさしくそれで、ただ啞然とするだけでした。もつとも、それほど時局の動きに関心を寄せていたわけでも、それを自分なりに整理してみようと思っていたわけでもありません。後で述べますが、統一に関するあらゆる動きが、そんな簡単な説明などを寄せつけない、安易な理屈付けを最初から断念させるものだったように思います。

新聞記事や論説の中でも時局の見通しについては、歯切れの悪さが感じられました。統一への慎重な態度も、或いは、そんなマスコミの自信の無さの現れだったのかも知れません。もつとも、統一へのしつかりした見通しは東西両ドイツ国民にももちろんなかったでしょう。ひょっとすると、要路の人物と、コール首相やゲンシャール外相などにも事態がどうすすむのかはつきりしていなかったのではな
いかとすら思われます。しかし、かれらは、為政者として重大な決断を下しました。こうして、これまでの経緯も将来への見通しも定かでないまま、一〇月三日の統一の日を迎えることになったわけ
です。

この統一の日のこと等については、日本のテレビで詳しく報道されたようで、よくご存じのことと思います。ベルリンはブランテンブルグ門の周辺。壁のうえで統一の旗を振る人たち。広場を埋め尽くす人びとの笑顔そして喜びの涙。相擁する東西の人、人、人。そしてブランテンブルグ門に連なる六月一七日通りを埋める車の流れ。打ち上げ花火の光と音。——この日の号外や翌日の新聞には、一九四九年以来のドイツ統一という宿願を果たしたベルリン市民の喜びの情景が感動的に載っていました。新聞によればケルンの場合も似たような状況だったようです。けれども、テレビや新聞は絵になるところしか写しません。華々しいところだけが人びとの関心を惹きますし、マスコミもそういうところだけしか伝えません。ベルリンやケルンでのお祭り騒ぎは大いに絵になっていましたようです。

しかし、私がいたフランクフルトでは事情は大分違っていました。日が替わって三日となった夜中に、宿舎に近い見本市会場あたりで花火が少し上がりましたので、ああ、今日は何かやるのかと朝を待って新聞を買い、見たら、市内のパウルズ教会で祝賀式典が執り行われるとのこと。見物しようと予定の時刻に合わせて街の中心部の観光名所レーマー近くの会場に出掛けて行ったのですが、それは市主催といった公式の行事ではなく、「赤・緑党」を憚った私的な——といっても当地の政財界の大物もあつまつた——行事とのことでした。もとより、一般人は会場には入れませんので広場や道路に立ち、スピーカーから流される音楽や演説によって中の様子を窺うだけです。それでも、華やかではないにしても簡素で厳肅そうな内部の雰囲気は感じとれました。しかし、会場の周辺は別です。貧相ななりをした若者たちが二、三〇人たむろして、西ドイツ国旗を焼き、統一反対のビラを撒く。「われわれには関係がない」とか「強大なドイツに死を」などのシュプレヒコールを上げ、デモをする。これを五、六〇人ほどのまことに体格のいい機動隊が取り囲み動きを封じようとする。そんな騒然とした、また雑然とした様子を、観光客を含めた市民達が——四、五〇〇人といったところでしょうか

——ただ黙念とつっ立って眺めながらスピーカーから聞こえてくるいくつもの祝賀演説に耳を傾けている。言ってみれば、まことに拍子抜けのした冴えない統一の日でした。これでは絵になりますまい。因みに、このパウルズ教会とは、一八四八年の三月革命のあとドイツで最初の国民立法会議の開かれたところで、それ以来ドイツ統一の象徴的な場所とされてきました。それが今日この日にこの有り様なのです。これに類したことはここフランクフルトだけではなかったようです。後になって、ドイツの他の街に滞在していた知友にこの日の街の様子を尋ねたところ、ヴェルツブルクでも大々的なお祝いの行事などはなかったそうで、花火が僅かにボンボンと上がったくらいとのこと。ミュンヘンなども同様で、お祭りの雰囲気など殆どなかったとのことでした。また、若い人に統一についてどう思うかと聞いたら、どうせ一緒になるのならオーストリアやスイスと一緒にになりたい、東ドイツの負債を引き受けるのは真平だという意見だったそうです。こういう反応には、ヴェルツブルクやミュンヘンといったバイエルンがこれまで北のベルリンやプロイセンに対していつも批判的だったという歴史上文化上の因縁が働いているのかもしれない。いづれにしろ、これも冴えない反応と言うべきでしょう。

なお、お祝いやらお祭り騒ぎということでしたら、サッカーのワールドカップでドイツチームが優勝した時は大変な騒ぎで、夜になると若者達が喜びのあまり車のクラクションを鳴らし放して街中を駆け回るといった有様でした。フランクフルトではこれが数夜続き、壁も窓も薄いわたしの宿舎がそんな走りやすい道路に面してしたために、彼らの興奮ぶりをしっかり味わわされたことでした。また——これは後にミュンヘンで経験したことです——大晦日が過ぎ、まさに新年を迎えたときの騒ぎ方（祝い方か）も凄まじいもので、家という家で、広場という広場で、また道路という道路で大変な量の花火がめったやたらに打ち上げられ、人びとはビールを飲みのみそれに興じていました。ですか

ら、元日の朝の街は花火の滓やゴミが散乱し、さながら市街戦のあとのような様子でした。

それはともかく、こういう騒ぎに比べれば統一の日は静かなものでした。ここから、統一の日のお祭り騒ぎと醒めた態度との混在に、この統一のもつ問題性が現れているなどとしたり顔で言うこともできそうです。

なお、この時期に多くの雑誌新聞が統一に関する特集号を出していますが、その多くはこうした反応を先取りするかのようになり、統一に伴う政治経済社会上の種々の問題を列記し、統一がお祝い事で済ませられるものではないことを指摘していました。また、統一とは言わば美名であって、じつは西ドイツによる東ドイツの併合に他ならないことを実例で示している記事もありました。それほど上品でない或る雑誌は、東西ドイツのみならず世界の著名人を、統一に対する貢献度によって英雄や予言者、またはならず者とか豚、恥知らずなどのレッテルを貼り早くも断罪していました。断罪されるのが主に東ドイツの著名人であることは言うまでもありません。平和裡にであれ、ひとつの国が滅びたのですから、こういうことも仕方がないのかも知れません。

ところで、統一を記念して郵便記念切手が発行されましたが、しかしその図柄は国旗の色をただなぐり書きしたようで傍目にはまことに雑に思われ、この統一が、切手の図案を練る時間を許さないくらい意表外のスピードで行われたことを示しているようでした。或いは、そのスピードを印象づけるために意図的にあえて雑な図案にしたのかも知れないのですが。

統一は成りました。しかし、人びとの生活や街のたたずまいは格別変わったようにも慌ただしくも見えませんでした。街のたたずまいといえは、ドイツでは時々「時間がとまっているようだ」などという表現がびったりする情景に出会ったりします。ことにシュタットミットと呼ばれる旧市街は、その外見はさながら過去のみに向かい変化というものを拒絶しているかのようです（中身は、その多く

が外見とは裏腹に、現代風に修復されているようですが。そのことが却って統一を巡る政治上経済上の動きの慌ただしさを浮かび上がらせるかのようには思われてきません。

統一という大事件も、生活物資が少し値上がりしたかと思われる程度で、生活には何の変化も及ぼしません。朝、簡単な朝食のあと駅の新聞売場へ出かけます。ここには、近くの国際空港から色々な人がやってくるからでしょう、どの言葉とも分からない言葉で印刷された数え切れない数の新聞が売られています。日本の当日の新聞もあります。そのうちから読み取ることのできるものを見出しを眺め、面白そうであれば買い込んで大学へ出かけます。新聞、そう簡単には読めませんし、大学ではなるべく専門の勉強をと思ったものですから、図書館で資料の検索や読書をし、また講義などを覗いて過ごしました。夕方、宿舎に帰って食事のあと新聞などを並び字引片手に見出しを追ってゆきます。内容まで仔細に辿ることはかなりの集中度を要します。大抵は推測を逞しくして大きな動きを捉えるように努めました。

統一に関する記事や論説も、統一後の見通しが立たないせいなのか、はっきりしないのに加えて、それを読む読み手が読み手なものですから、それらはさながら朦朧体の小説のようです。——しかし、これが逆に、ドイツの情勢はこれからどうなっていくんだろうなどと考えるきっかけになったように思います。加えて、週末や休日に多くの街をたずね、その古さと新しさを調和させようという彼らの意思を感じて感嘆したり、時間の経過の緩やかさと、それにもかかわらず事態が着実に進行してゆくことに驚いたり——例えば、道路工事など何時やっているかわからないうちに少しずつ進んでいるといったやり方にも認められます。日本流の突貫工事といったものはいたって少ないのではないでしょうか——、またミュンヘン近くのダハウ強制収容所跡で見た五〇年前の死体焼却炉の生々しさに背筋を冷やしたりしました。以下は、そんな中で折に触れて心に浮かんだ由なし事的一端です。

世の動きが予測できるうちはまだいい。それが人の予測を越えて激しく突き進んで行く時、そこには将来や現在にたいする様々な思いが浮かんできます。その思いは、しかしその人がどういう立場の人であるか、どういう考えの人であるかによって或る特徴を持ったものになりましょう。その動きの真っ直中に生き、また生きざるを得ない人びとは、例えば世の行く末に希望をもったり不安や危惧を覚えたり、また現在の事態に立ち到るに際して何の手立ても講じえなかつたことに悔恨の念を覚えたりしながらも、しかし、日々の生活に追われて世の動きに揉まれて生きていくことでしょう。

他方、この動きの中にいながら、この動きを自分の生き方から切り離し、ひたすら眺めようとする人もいます。時代に超然とした人とか動きを自分の身に引きつけて考えない旅行者とか一時的滞在者というような人びとです。こういう人たちはそこの生活から離れている分、個々の動きを越えた動きそのもの、またその帰趨に関心を向け、それらを知ろうとします。しかし、その際彼らを動かしているのは主に好奇心や知識欲であって、一般に生き喜び苦しむ人びとの真剣さを欠いています。たしかに、人びとに対する同情の念がこれらの人びとの心に湧き上がることもありましょう。でも、根本的には傍観者流の気楽さといったものがこれら人びとの態度を特徴づけています。被災地をルポルタージュする人やその調査研究にたずさわる人たちもこれに近いと言えるかも知れません。知的に対処するということは、取りも直さず、このような傍観的態度を、例えば静観的態度としてとることに他ならないからです。

以上の二つの態度に対して、この動きのなかに立ちながら流されることなく、この動きそのものを、その由来や帰趨ともども、——単なる知的的好奇心からではなく——他ならぬ自分の生き方に係わる問題として受け止め、これを知的に明らかにしようとする態度もあります。時代の動きや問題にダイレクトに取り組むような時のことです。こういう態度は、時代に対する真剣な思索として一般的には歴

史の哲学と呼ばれてよいものでしょう。

ところで、こういう時代の問題に対する真剣な態度、そしてこういう態度をとる思想家がこの頃すっかりなくなってしまった、と言われます。つまり、歴史の哲学は現在すっかり落ち目になってしまったというのです。この見方はもうずいぶん前から一般的なものとなっていていますが、現代においてはことのほかそうらしいのです。例えばこの事情をドイツ哲学会の大会を報ずる新聞記事の中に見て取ることができます。

一九九〇年一〇月初め、ドイツの二三の新聞はドイツ統一と同じ時期に北ドイツのハンブルクで第一五回ドイツ哲学会大会が開かれたこと、そこでの主たる関心が「現在」、つまり「哲学の現在」および「現在の哲学」にあったことを伝えていきます。というのも、この大会を主宰したヘルバルト・シュナーデルバッハによれば、哲学は現在好調だし、これを利用してはならないが、そのためには哲学は、おのれに引き籠もって歴史的な自己反省をこととするのではなく、現在の諸問題に身を開いておかねばならないのだ、という訳です。こうしてこの大会では非常に今日的なテーマが並ぶこととなりました。例えば、現代においては諸分野の連関が曖昧になり、或いは裂け目が大きくなっていることを反映して、「人間と自然」「政治と道徳」「経済倫理学」「テクノロジーと倫理」「学問と文化」といったテーマが立てられ、そして、記事によれば、これらテーマをめぐって一〇〇以上の発表がなされたとのことです。例えば、人間の自己理解と世界理解の基盤をわれわれの日常的コミュニケーション的に了解可能な根本構造に置くことを説くハーバーマスの講演として、また、自己自身と自然に対する人類の責任の概念を、かつてのよう自由の概念ではなく、いま風に、自然の概念に基礎づけようとする報告、等々として展開されました。

たしかにニーチェやカント、プラトンやその他への歴史的文献学的な着実な研究もあれば、周知の

諸見解が変奏をうけて発表されただけというものもあったようですが、全体としては、新しい現代的な問題が主流を占めたことは間違いないでしょう。しかし、哲学の現在を主要関心事としたこの大会の成果ということになると、どうなのでしょう。記者が言うように、結局は、現在を哲学的に把握する可能性をたずねることが困難な問いであることを確認する結果に終わったのでしょうか。調べてみたいところです。

それはともかく、そこで目につくのは、現在の諸問題を考察の対象としながら、それら問題を歴史的に捉えようとするものが少ない、つまり、現在を過去との関連でみようとすると見方が少ない、現在のこの激動がどこに由来しどこに向かおうとしているのか、という観点からの問いかけが少ないように見えることです。これは、統一の例でも分かるように、現代における動きがあまりにも早く、しかも大きく変化するために、それを捉えきることが難しいからなのかも知れません。

たしかに、物事が動いて止まない時、それについて考えを纏めようと思っても纏まるものではありません。われわれの目が、動くものだけに注意を引きつけられながら、その実静止したものしか見ることができないように、われわれの考えも、物事の動きが止まってはじめて纏まったものになりうるのです。ヘーゲルは、このことをいみじくもかの有名な「ミネルヴァの梟は夕暮れに翔ぶ」と言い表しました。これは世界の思想としての哲学に関してですが、哲学は、現実がその混沌とした形成過程を完了し、自らを完成し終わった後にはじめて現れるというのです。つまり現実が成熟し終わってはじめてその本当の有り様において知的に把握されるのだという訳です。このことは、ヘーゲルを好むと好まざるとにかかわらず、承認できることだろうと思います。

このことからすれば、現代はその動きが激しいため、それを固定し知的理解にもたらすことが難しい、そしてこの事情が時代を問う問いを押しえているのだ、とまずは考えられます。

ですが、それだけでしょうか。かつて歴史を考え、その意味を求めること他のどの国にもまして人びとの関心を引きつけたこのドイツにおいて、しかも傍目には歴史の結節点とも見えるこの現在に歴史への関心が比較的薄いように思われるのは、そこに何か他の理由があるのではないのでしょうか。例えば、歴史的に考えることへの禁忌、更には、歴史の哲学への嫌悪感といったものが。もしそうであれば、歴史を哲学の主題にまで高めたヘーゲルと彼の『歴史哲学』がその責任の一端を引受なければならぬのかも知れません。つまり、ヘーゲルがそこで言っていることがあまりにも極端なことばかりなので、みんなが呆れ返ってしまった。それ以後現代においても、歴史について考えるとか、歴史の哲学を考えるとすることは全く人氣がなくなつて、むしろ避けたがつている、これが関心が薄い理由なのだ、と。

因みに、ヘーゲルの『歴史哲学』を實際読んでみれば、豊かな歴史的知識に満ち、ヘーゲルの世故に長けている側面も感じとられて結構面白いのですが、しかし、序文に述べられた綱領めいた部分人が引きつけるとともに多くの人を反撥させることとなりました。というのも、そこでは、世界の歴史は人間離れのした、言わば神がかりの理念の発展史であること、世界には理性が支配していること、したがって世界の歴史は世界精神の理性的かつ必然的な進行でなければならぬなどと宣明されています。してみれば人間的なものは軽んぜられ、個人の自由も無視されていることとなります。すべては理性によって予め決定されており、おまけに、歴史の進歩がヘーゲルの生きる現在で完成すると言われます。こういうのが「歴史の哲学」だとすると、「歴史の哲学」とは人間の分も弁えず、人間の自由も認めず、豊穡な現実の中にひたすら怪しげで単純な理性の跡のみを見ようとす現実離れのした荒唐無稽な企てと解されても仕方ないかも知れません。(実際は、ヘーゲルの歴史哲学はこんなものではないのですが、そう誤解される面も持っていました。)したがって、このような説を信じられ

ればともかく、そうでない人は、「歴史哲学」なるものに、ひいては歴史への思索に胡散臭さを感じ警戒するようになったのも当然と言えましょう。

こういう訳からでしょうか、実証的歴史学者でありながら歴史の本質へ深い理解を持っていたレオポルド・フオン・ランケや、文化史家として独自の観点から歴史思索を行っていたヤーコブ・ブルクハルトは、かれらの優れた歴史への洞察にもかかわらず、終始、ヘーゲルや歴史の哲学に対し一貫して否定的な態度をとり続けました。一般の歴史学者の場合はおおさらのことです。こうして、歴史の哲学は、唯一歴史が哲学の一部分たりえたドイツにおいてすら影の薄いものに成り下がり、さらに科学主義や実存主義の時代ともなると、人びとの間に歴史離れがすっかり身についてしまった。そして現在もその延長線上にあり、これが前に見たように、時代の結節点ともいえるべき激動期であっても歴史的なものへの関心が薄いということの理由の一つになっているのだらうと思われる訳です。

しかし、時代がまだ定まらないから歴史を考えることが出来ないとか、歴史を考えることなどそもそも胡散臭い試みだとかの理由で、歴史の帰趨、構造、つまりは本質への問いをネグレクトしてしまっているのでしょうか。そして可能なのでしょうか。

そんなことはありません。私たちは激動する現代という時代に生きて政治経済社会等の動きに翻弄され或いは激動する時代の波に自ら乗っついていこうとします。生きるとういことは、時代が課すものに対処しつつ生きるということなのです。ただ受け身に流されていくことだけではないのです。ただし、動きに対処するために私たちはまずその動きを見極めなければなりません。それには、その動きの由ってきた由縁をたずね認識しなければなりません。そうしてようやく現実の動きが理解されるのだと考えられます。すなわち、認識者として立つことがまず必要なのです。このことは、その動きを一時なりと止め静止させること、自分の生きる世界を自分自身から突き放すことであり、現実からその

現実性を奪うことであり、世界を灰色一色に塗り固めることを意味しましょう。それは、まえに見たように、傍観的な態度とも言えるものでしょう。

しかし生きるとは、このような認識者として現実に向かうことだけを言うのではありません。多彩な現実を理論という灰色に塗り込めるのも、実は私たちが彩り豊かな現実のなかで行為しつつ生きるためなのです。私たちは私たちを翻弄する現実をその由来と帰趨とにおいて理解し、そして、そのように理解する自分自身との関連においてその現実を意味付け、ときにそれを変えようとしませす。「自分にとって、現実とは、歴史はどうあるべきか」という訳です。生きるとはそういう実践的な関心をもって生きることなのでしょう。このような実践的関心に裏打ちされた歴史への関心——これこそ本当の意味での「歴史意識」と言えるでしょう。そして、このような意識に基づいて歴史を思索することをもまた「歴史の哲学」と呼ぶことができると思われます。こうして、実践的関心をもって現実の認識を目指すとき、そこには歴史の本質への問いとしての「歴史の哲学」が登場して来ざるをえない考えられます。

以上の次第であれば、現代においても歴史の哲学は登場しうるはずであり、登場しなければなりません。それは、もはやヘーゲル流の歴史哲学である訳にはいかないでしょう。むしろ、それへの批判者にして、しかも現実を歴史との関連で考えようとしたブルクハルトやニーチェの歴史観のうちに認められるものと考えられます。

この意味での歴史への思索は、しかし、ブルクハルトやニーチェのそれに限らないでしょう。歴史哲学の衰退が言われて久しいドイツ哲学界においてもニーチェやブルクハルトの思想を現代に呼び入れるというかたちで歴史思索が行われていますし、そして「現在」のみが中心的関心ともなった観のあるハンブルクの哲学会においても、例えば、前に挙げたシュナーデルバッハの「哲学の現在」を問

う問いのうちにも歴史への関心が、隠れたかたちで込められているように思われますし、現在の思索を過渡期の思索ととらえるアーベルやマンフレッド・リーデルの問いにも同じように込められているように思います。してみれば、ドイツ哲学会のテーマである「現在」への問いは、その現在への関心の根底に、歴史への真剣なアプローチの可能性をひそめていると見ることができましよう。

このことは、いずれよく調べてみようとしますが、やはりそうだとしたら、ドイツを見舞った激動が人びとの間に歴史意識をよび起こしたと考えられ、こうして、よく言われるような、歴史の激動が人びとに歴史を考えさせるといふ通説を証明することになったと言ってよいかと思います。歴史の哲学は、こうして、復権していきつつあるのかも知れません。

やはり、ドイツは歴史の国だったので。静かな街並みを歩きながら考えて、このことを少しばかり理解できたように思います。ご静聴ありがとうございます。

追記 本稿は昨年九月、弘前大学哲学会大会においてお話したものに一部手を入れたものです。なお、稿を草するに当って多くの方のご教示を得ました。話の内容が主にドイツ統一を軸としており、今となつてはいささか古くなりましたが、敢えてそのままにしておきました。世界の動きの激しさに驚くばかりです。(四・六・三〇)